Awamura Akamitsu
あわむら赤光
illustration 夕薙

黄昏（たそがれ）の騎士団、蹂躙（じゅうりん）、蹂躙（じゅうりん）、蹂躙（じゅうりん）す

特別短編

その女、古風につき

GA文庫

The Imortal Army strikes again and again!

特別短編　その女、古風につき

天坂真由は、全身を小刻みに震わせていた。
大和撫子然と、後ろで一房に括って垂らした黒髪も、その毛先が不安げに揺れ動いていた。
羞恥のためである。
良家に生まれ、この春にお嬢様学校を卒業したばかりの十八歳。幼い時分から磨かれた、真っ白な玉の肌が今は紅桜色に上気している。
夏場にもかかわらず、長袖デザインに襟元まできっちりとボタンの締まった、清楚なブラウス姿の真由。スカート丈も膝下三センチと長めのもの。
そのスカートの裾を、真由は緊張を隠せない両手で、にぎりしめていた。
そして、すぐ隣にいる少年――裏城紫苑に向かって言った。
「……お願い……ですっ……。私を不死者にしてください……っ」
憎っくき新参者に懇願――否、哀願する。
耐えがたき恥辱で、もう紫苑の顔を見ていられない。視線をうつむけて逸らす。
その目元は涙で潤んでいる。

対照的に、紫苑は薄笑みを湛えていた。
いつもの彼。いつものヘラヘラとした表情。
ねっとりとした視線で、羞恥に悶える真由の顔や、膝から下の素足を堪能するかのよう。
そんな男の下劣な眼差しから、だが真由は逃げるわけにはいかないのだ。
「お願いですから……っ」
もう一度、上ずった声で哀願する。
意を決して、両手でつかんだスカートの裾を、紫苑の目の前でたくし上げていく。
もはや目を開けていられない。ぎゅっと堅くつむってしまう。

どうしてこんなことになったのだろうか？
話は昨日の午前中まで遡った――

◗

（ああ、なんてお美しい佇まい……っ）
と――真由は内心、感嘆していた。
視線の先には、上坂蒔ヱの凛とした立ち姿がある。

右手に矢、左手に和弓を携え、円状の的を凝らし見る真剣な横顔。
同性から見ても、惚れ惚れとするほど美しく、格好良い。
ただし、蒔ヱは決して男勝りであったり、中性的な容貌ではない。
むしろ逆だ。
真由に似た――いいや、真由よりもっと優しげで、たおやかな顔。
よく実った乳房は、弓道衣の上から胸当てを着けてもわかるほど。
袴に包まれた両脚はすらりと、欧米のトップモデルばりに長く、腰の位置が高い。
そんな「すこぶるつき」の女である蒔ヱが、毅然たる立ち居振る舞いでいるからこそ、同性すら魅了してやまぬほどに凛々しく映えるのだ。
その蒔ヱが、的を真っ直ぐに見たまま、静かに矢をつがえる。
美しく、何より正しい挙措で弓を引く。
弦がじりじりと絞られ、同時にまた周囲の空気も張りつめていく。
場所は洋館の裏庭だ。弓道場ではない。的は庭木の枝から吊るし、テラスを射場に見立てる間に合わせ。にもかかわらず、伝統と格式を持つ弓道場にいるかのように錯覚させられる。蒔ヱが醸し出す空気がそうさせる。
ヒョウ、と矢を放つ蒔ヱ。
最後まで美しく、正しい所作。

そう、結果を見るまでもなく、的に中ることを予測させるに足るほどの。
実際に矢は小気味良い音をさせて、六十メートル先の的に突き立った。
蒔ヱは眉をきりりと引き結んだまま、しばし残心。
己が放った矢の結果を見つめ、五秒……十秒……ようやくその表情が緩む。
まさしく女性的な、艶然絢爛たる微笑を湛える。
それで周囲に張りつめていた、厳粛な空気も霧散した。
「お見事です、大伯母様！」
脇でテラスに正座して見守っていた真由もまた、満面の笑みに拍手喝采で蒔ヱを讃える。
「も～、大伯母はやめてって言ってるでしょ？　それおばあちゃんとほぼ同義よ？」
「でも一門のしきたりですから！」
蒔ヱがにわかに眉をひそめて抗議してきたが、真由は気にも留めず拍手を続けた。

真由と蒔ヱは遠縁に当たる。
並べば姉妹にしか見えない二人だが、実は曾孫と曾祖母くらいに歳は離れている。
蒔ヱはエミルナから、《時の特権》を授かった大騎士。
自らの時間を止め、若さを保ったまま、百年間も《月の女王》を護り続けている女傑なのだ。
そして、本家の神坂と分家の上坂・天坂の一門は、その百年の前から五代に亘ってエミルナ

を主と仰ぎ、陰から支援している間柄。
ゆえにエミルナの右腕として、《月の陣営》最強騎士として、悠久の時を生きる蒔ヱのことは、一門の誰もが誇り、尊敬してやまない。「大伯母」と呼び慕うのがしきたりであった。

蒔ヱが新たな矢を、弓につがえる。
女の細腕にもかかわらず、張りの強い弦を引き絞っていっても、上体が全くブレない。
蒔ヱの体に――軸に、何か一本の芯が通っているかのよう。
そのことが真由の目には、何よりも美しいものに映る。
蒔ヱの射は狙い過たず、再び的に突き立った。
先ほどの矢と、三センチと離れていないだろうすぐ隣にだ。
「お見事です、大伯母様！」
真由はうっとりと見つめながら、その名人芸に拍手喝采。
「別にこれくらい、誰でもできるようになるわよ。百年も続けていれば、ね」
残心をすませた蒔ヱが、照れ隠し半分に冗談めかす。
「百年もお続けになっている、その不断不朽の努力は、誰にでもできるものではありません！」
真由は拍手を止めず、ご謙遜をと大伯母を絶賛する。
実際、蒔ヱは武芸百般。

弓道の他にも剣道、薙刀道、合気道となんでもござれ。
しかもその全てにおいて達人、名人級なのである。
それがエミルナの第一の騎士にとっての、嗜みだからと。
「まあ、武術にどれだけ秀でたところで、《騎士特権》で戦う天位継承戦には、意味がないんだけれどね～」
「武道とは精神修養！　道を極めることが、心力の向上に繋がることと真由は存じます！」
真由は微塵も疑うことなく、ご謙遜をと大伯母を絶賛する。

彼女もまた、エミルナから《弓張り月の特権》を授かった騎士。
その《騎士特権》を用いれば確かに――今しがた蒔ヱが披露した名人芸が、児戯に見えてしまうほどの――超人的な弓射の業を駆使することはできる。
しかし、《特権》に頼らない素の技量では、真由のそれは蒔ヱに遠く及ばない。多少の天稟など鼻にかける気にもならないほど、次元が懸絶している。
ましてメンタルの強い弱いで言ったならば、真由などまだ小娘も小娘だ。
その差がそのまま彼我の心力の違いとなっており、騎士としての真由の実力もまた、大騎士たる蒔ヱの足元にも及ばなかった。

「さあ、大伯母様。お次を」
真由は新たな矢を、いそいそと蒔ヱに差し出す。
「あ、ごめん。今日はこの辺で～」
しかし蒔ヱは額の汗をハンカチで拭いながら、やんわりと断る。
「えっ。もうですかっ」
真由はびっくり。突然の「凛々しい大伯母様観賞、中断のお知らせ」にがっかり。
いつもの蒔ヱなら、もうちょっと稽古に打ち込むはずなのに。
「んふふ～」
蒔ヱはいたずらっぽい、それでいてオトナの色気たっぷりの微笑を浮かべると、
「紫苑君と約束してるのよ。今日これからお買いもの」
「大伯母様があの新参者とデデデデデデート！！？？」
「デートなんて言ってないでしょ？　お・か・い・も・の」
「じゃあなんでそんなに楽しそうなんですか！　うれしそうなんですか！」
蒔ヱの笑顔をビシビシと指しながら、真由は詰問した。
「そこまで言うならもうめんどくさいし、デートってことでもいいけどー？」
「不潔ですッッッ」
真由は声を大にして非難した。

「どうして？」
「あの新参者は、分不相応にも姫様に懸想（けそう）しておるのでしょう⁉　なのに大伯母様とデートだなどと浮気ではございませんか！」
「ちょっと買い物行って、ランチしてくるだけで、浮気は大げさでしょう？　第一、その姫様ご公認だし。ホテルでご休憩してくるわけじゃないんだし」
「大伯母様‼」
蒔ヱがわざと下世話な言い方でからかってきて、真由は真っ赤になって怒鳴った。
十八にもなってそんなに初心な反応しかできないのを、蒔ヱはニヤ～ッと人の悪い顔つきで眺めてくる。私が箱入り娘なのがそんなに面白いですか！
「姫様にはお立場があるのは、真由だってわかるでしょう？」
真由がにらんでいると、蒔ヱが真面目な口調になって諭してきた。
「釣った魚にエサをあげられないのよ。でも、紫苑君は年頃の男の子なんだし、焦らされまくって思い詰めたら、姫様相手に間違いを起こしちゃうかもしれないでしょう？　そうならないよう適度にガス抜きしてあげるのも、翻って姫様を守ることになると思わない？　つまりはわたしの騎士としての務めよ」
「うっ……。そ、そういうものなのでしょうか……」
「まあ、わたしも紫苑君とデートしたいだけなんだけどね」

「大伯母様！」
せっかく納得しかけていたのに、茶化された真由はまた目尻を吊り上げて怒鳴る。
「信じられません！　あんな子どものどこがいいんですか！」
真由と紫苑はたった二歳違いにもかかわらず、この言い様。
いや、たったそれだけしか変わらないからこそ、よけいにでもガキだとあげつらいたくなる、自分たちオトナとは違うと主張したくなる、そんな心情。
「えー、そのまだ子どもっぽくて可愛いところが母性本能を刺激されるし、でもいざとなったら誰よりも頼もしくて乙女（おとめ）回路がくらくらきちゃうとか、一粒で二度美味しくない？」
「あの新参者が頼もしいだなどと、ご冗談を！　いつもヘラヘラして、姿勢もグニャグニャで、それでも男子かと情けないったらありゃしません！」
「そうかなー？　紫苑君は誰よりも強い芯が一本通った、男の子だと思うけどなー？」
「ご冗談を、大伯母様！」
「でも実際に、彼は初陣（ういじん）で〝氷の牙（ザ・フリーズ）〟を討ち取ってしまうほどの騎士よ？　彼がいなかったら、わたしは生きていなかったでしょうし、姫様も守れなかった」
「あの新参者がそれなり以上に強いというのは、認めるのも吝（やぶさ）かではありませんっ。でも、不滅の肉体を持っているのですから、多少強いのは当たり前でしょう？　仮に大伯母様にも不滅の肉体があれば、より強いのは絶対に大伯母様の方です！」

「えー、わたしが不死者になっても、紫苑君には敵わないと思うけどなー」
「そんなことはありません！　大伯母様は《月の陣営》最強の騎士！　エミルナ様の右腕なのですから！」
「あはは、それもう紫苑君だってば」
「私は絶対に認めません!!」
真由は尊敬する蒔ヱを、キッとにらんで断言する。
大声の出しすぎで、息が切れていた。肩が大きく上下していた。
それでも真由は、蒔ヱが紫苑より格上だと認めるまで、食い下がる。
ピリピリとした空気を全身から発しながら、蒔ヱをにらみ続ける。
しかし、蒔ヱはさすが柳に風とばかりそのプレッシャーを受け流すと、
「まー、真由はまだ他人を表層的にしか見られないみたいだし、そういう感想になっても仕方ないかな？　子どもにはまだこの味は早かったかな？」
いたずらっぽい笑みを浮かべて、わざとらしく煽ってくる。
「くっ……。お人が悪いです、大伯母様っ」
「じゃあね。行ってきまーす」
「待ってください、本当にあんなお子様とデートを!?　どうか考え直してください！」
「も～、真由はいい加減、姉離れしなさいよね～」

蒔ヱはちゃっかり自分のことを「大伯母」ではなく「姉」呼ばわりしつつ、
「他人のことはいいから、真由もどっかで男を見つけて、デートの一つや二つしてみればー？」
「興味ありません！　私は姫様に仕える騎士です！　必要ありません！」
「わたしは姫様の大騎士ですけど、興味ありまーす」
蒔ヱは屈託のない笑顔で冗談めかしながら、テラスを後にした。
取り残されたのは真由だ。
差し出すも受けとってもらえなかった矢を、悔しさでにぎりしめる。
「裏城紫苑……あの新参者……っ」
歯噛みさせられる。
あの新参者は、不当にも蒔ヱから最強騎士の看板を盗っていったばかりか、蒔ヱ自身まで真由から奪っていこうというのか。
なんて苛立たしい奴だろう。腹立たしい奴だろう。
あの裏城紫苑という少年が《月の陣営》に入ってからというもの、真由はずっと意識させられていた。
あのヘラヘラとしたムカつく顔が、脳裏にこびりついて離れなかった。

その日の夕刻――
真由は廊下の通りがかりに、リビングで寛ぐ紫苑の憎き姿を発見した。
蒔ヱとのギート買い物から帰ってきたのだろう。
今はソファでテレビを観ていた。水原渚（みずはらなぎさ）と二人で！
（この新参者、いつも違う女と一緒にいますね）
なんてふしだらな男だろうかと、真由はますます紫苑を軽蔑（けいべつ）する。
眉をひそめながらリビングに入り、
「裏城紫苑……さん。少しよろしいかしら？」
「うん、いいよ。真由さん」
紫苑はテレビのリモコンを操作すると、低俗なバラエティ番組（見たことはないけどきっとそう！）ごと画面を消した。
紫苑と渚は、コーナーソファの折れ曲がった部分を挟んで左右にわかれ、広々と陣取っている。真由は少し考えた後、紫苑から遠い位置、渚の隣に腰を下ろした。それで渚が気を遣い、やや中央寄りに座る位置を変える。
「で、僕になんの用かな、真由さん？」
「口の利き方」

「え？」
「前々から思っていたのですが、あなたは口の利き方がなっていません」
「あ。はい」
「私は十八、あなたは？」
「……ごめんなさい。……目上のお姉さんには、敬語を使うように気をつけます」
「わかればよろしい」
紫苑が慌てて背筋を正すのを見て、真由は満足げにうなずいた。
その紫苑の畏縮した態度がよほど面白かったのか、渚がプッと噴き出す。
紫苑はそちらを恨めしげにひとにらみした後、また神妙な態度になって、
「真由さんではなく、天坂さんとお呼びすべきでしょうか……？」
「それは真由のままで構いません」
「え、そうなんですか？」
「私はまだ、天坂の看板を名乗れるほどの一人前ではありませんから」
「……旧家ってめんどくさいッスね」
「何か？」
「まじかっけーッス。そこに痺（しび）れる憧れるッス」
「口の利き方！」

「心の底から格好がおよろしいと存じます。そこに感極まり、憧憬を禁じ得ないです」
「見え透いた世辞は、はっきり不愉快ですね」
「どうすりゃいいのさ……」
紫苑が助けを求めるように渚へ目をやる。
「あたしを巻き込まないで」
渚はプイッと顔を背ける。
「そんな薄情な……」
と、諂い笑いを浮かべて助力を求める紫苑に、渚はそっぽを向いたまま、
「どうせあんたがなんか、真由さんを怒らせるようなことしたんでしょ？　だったらさっさと怒られて、わだかまりを解消しなさいよ」
「いやその怒らせた心当たりがなくてだね……」
「紫苑は女心とか、ちっともわからないものね」
「だから女心に詳しい渚さんに、ひとつご仲裁を……」
「高くつくわよ？」
「見返り要求するの⁉」
「は？　当たり前でしょう？」
拝み倒さんばかりの紫苑に対し、渚はあくまでツンケンした態度を貫く。

そんな二人のやりとりを真由は傍から眺め、
（本当に情けない姿だこと。女の尻に敷かれるとはこのことです。こんな男のどこが、一本芯の通った人間だというのでしょうか？　大伯母様の仰ることといえど信じられません）
と、ますます紫苑への軽侮の念を募らせていた。
「はあ……」
呆れの嘆息一つ、気分を切り替える。
咳払いをして、紫苑の注意を自分に向ける。
そして、真由は高飛車に要求した。
「裏城さんにお願いがあるのですが」
「それ、人に物を頼む態度かなあ」
「口の利き方！」
「それは人に物を頼む時に相応しい態度なのでしょうか、いやそうだとは思えません」
「慇懃無礼！」
「ああもう、いいからそのお願いを聞かせてくださいよ」
「最初からそう言えば早いのです」
フンと真由は鼻を鳴らすと、その要求をきっぱりと口にした。
「大伯母様を、あなたの《騎士特権》で不死者にしていただきたいのです」

「「えっ……」」
紫苑のみならず、渚も驚き眼(まなこ)になって固まる。
まあ、それくらい唐突な要求だったのは、真由も認める。
真由自身、今日の蒔ヱとの口論の後に急に思いついたことだ。

この新参者が、いきなりエミルナの右腕然と威張り腐るのも、蒔ヱのお気に入りとなってしまったのも、騎士として強いからだ。きっとそうだ。
でも、真由は思う。蒔ヱが不死者になれば、この軟弱者より強い。きっと強い。
さすれば蒔ヱは《月の陣営》の最強騎士に返り咲き、また「自分よりも弱い殿方」などというものに愛想を尽かすことは必至。きっと必至だ。

（この新参者に頭を下げるなど業腹(ごうはら)ですが、大伯母様が不死者になってしまえばこっちのもの。それまでは耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで、神妙にしていましょう）
蒔ヱは一ミリたりと頭を下げず、ふんぞり返ったまま、そんなことを考えていた。
すると――
「あー……背に腹変えられない状況とか抜きで、不死者になるのはオススメしませんよ……」
紫苑ではなく、渚の方がおずおずと言い出した。

その表情から親切心百パーセントであることが窺えた。
ふむん、と真由は目をしばたたかせる。
この渚もまた不死者である以上、その意見や体験談には耳を貸す価値がある。
「それはなぜでしょうか、水原さん？」
「不死者になっちゃうとですね、こいつ――〝不死の騎士公(ジ・イモータル)〟に逆らえなくなっちゃうんですよ」
「すみません、『逆らえなくなる』というのは少し抽象的で、理解が――」
「ぶっちゃけ絶対服従レベルになります」
渚は心底うんざりした顔つきで告白した。
聞いて、真由はもう一度目をしばたたかせる。
「失礼ですが、水原さんが裏城さんに絶対服従とは、とうてい見えないのですが？」
なにしろつい先ほど、紫苑が渚の尻に敷かれている様を目撃したばかりだ。
「もちろん、普段はなんてことないんですよ。影響ゼロっていうか……あたし、こいつのこと嫌いだし、ずっとムカついてますし」
渚はジト目で紫苑をにらみながら、吐き捨てるように言った。
やはり絶対服従どころか、従順さのかけらもない態度だ。
「僕が声に心力(プネウマ)を込めて命令しない限りは、渚が僕の言うことを聞くなんてことないです」

紫苑も横から説明した。
（なるほど、そういう《騎士特権》なのですね）
真由も一つ納得がいき、質問を重ねる。
「声に心力（プネウマ）を込めた命令には、渚さんは絶対に逆らえないのですか？」
「ええ……まあ……不本意ながら」
「今この場で一度、試してもらっていいですか？」
「いいッスよー」
「あたしはよくない！」
「まあまあ、センパイの頼みなんだから。ここは一肌脱ごうよ」
「あんたは何も脱がないでしょ!?　ひどい命令したら絶対許さないんだからねっ」
「わかってる。わかってるってば。もちろんシャレですむやつで」
噛みつかんばかりの剣幕になった渚に、紫苑はたじたじになって何度もうなずく。
それから「すっ」と息を吸い、声に心力（プネウマ）を込めて命じた。
「**『真由さんのおっぱいを揉んで』**」
効果は覿面（てきめん）だった。
「あんた、後で覚えてなさいよ!!」
渚が首から上では紫苑に向かって怒鳴り散らしながら、首から下はまるで別人のような動き

で真由をソファに押し倒し、両手で無遠慮に乳房を揉みしだいてくる。
見るからにグラマーな蒔ヱや渚と違い、真由のそれは楚々（そそ）たるものだ。しかし、ふくらみがないわけじゃない。それをもう寄せるわ、上げるわ、こねるようにするわで、渚にたっぷりと蹂躙（じゅうりん）されてしまう。
真由は必死で悲鳴を呑み込んだ。憎たらしい紫苑の前で、そんな情けない姿は見せられない。しかし顔が引きつる。恥ずかしくて、あわあわと震える。
「とりあえず、その辺で**『終わりにしてあげて』**」
「なんてことさせんのよ！」
「なんてことをさせるんですか！」
真由は渚と二人、大声でツッコんだ。
それから上体を起こし、紫苑に背を向け、慌てて着衣の乱れを直す。
一方で渚は紫苑へと詰め寄り、食ってかかっていった。
「し～～お～～ん～～～～？」
「そんなに怖い顔しなくてもいいじゃないか、渚ー。僕が真由さんの胸に触ったのなら問題だけど、女同士なら別に問題ないじゃん？」
「そんなわきゃないでしょ！」
「えっ。そうなの？」

「あんたが仮に、淳司に尻を撫で回されたらどうすんの⁉」
「軽く人間不信になるかな」
「同じこと！」
「あー。なるほどー。これは僕が悪かったね。なにせ女心がわかってないから」
紫苑は悪びれるどころか、むしろ渚の先ほどの発言をチクッとやり返す。
渚はもう額に青筋を浮かべると、無言で紫苑の胸ぐらをつかんでガタガタと揺する。
ところが紫苑はヘラヘラとしたまま、むしろ楽しげにするばかり。
孤独な入院生活を長年続けた彼にとっては、こんなスキンシップでさえ堪らなくうれしいものなのだと、紫苑を色眼鏡で見ている真由には察することができなかったが。
（こ、こんな辱めを受けたのは、生まれて初めてですっ）
着衣の乱れとともに体裁を整えると、真由は再び紫苑に向き直り、キッとにらみつけた。
天坂家の方針で文武両道に躾けられた彼女だが、本質的にはお嬢様学校育ちの箱入り娘。服の上から同性に胸を揉みしだかれただけとはいえど、それを紫苑に見られたのは、真由にとっては裸体を覗かれたのにも匹敵する恥辱だった。
（責任！　責任をとらせるべきです！）
頭の中でそんなことを考えつつ、紫苑に向かって高圧的に言い放つ。
「事情はよくわかりました……。そういうことでしたら、この私を不死者にしてください！」

「え……？」
紫苑は最初のお願いを聞いた時以上に、きょとんとなった。
「本気……？　ですか……？」
渚もまた思わず紫苑の胸ぐらを離してしまうほど驚いていた。
一方、真由はむっとして、
「何がおかしいでしょうか？　私は《月の騎士》です。姫様をお護りするため、より強くならんとするのは至上命題。ゆえに不死身の肉体を求めるのは、至極当然のことでしょう？」
「そこはわかる……んですケド」
渚は言葉とは裏腹に、理解しかねるといった表情で、
「真由さんもさっきのやりとり、見てたでしょう？　不死者になるってことは、このバカ紫苑の言いなりになるってことですよ？　あたしはもう他に選択肢がなかったですケド、真由さんまでそんな危ない橋を渡る真似は……」
「その点については、ちゃんと考慮いたしました」
真由は侮らないで欲しいと眉をひそめる。
確かに、紫苑がその気になれば、どんな命令でも従えさせることができるというのは考え物だが――この新参者、恐らくチキンなのだろう――度し難いほどひどい命令は、出せない

性分のようだ。

もしそんな命令を出す人間なら、渚との関係はとっくに破綻し、蛇蝎の如く嫌われ、憎悪されているはず。

あるいは紫苑は惚れたエミルナへの手前、悪逆非道な真似を慎んでいるのか。

ともあれ彼がこの人畜無害さならば、不死者になる強力なメリットに比べ、デメリットは看過できるレベルだと真由は判断した。

とは言えである。

蒔ヱを不死者にして欲しいという最初の要求は、取り下げざるを得なかった。

敬愛してやまない蒔ヱに、ほんのわずかのリスクでも背負わせるわけにはいかなかった。

渚よりも蒔ヱの方が遥かに女性として魅力的である以上は（真由の感想です）、紫苑が蒔ヱを自由にできるとわかった途端、雄としての本性を自制できなくなる可能性も高いし（真由の感想です）。

（ならば大伯母様のために、まずはこの私が実験台となって安全を確かめるべきでしょう）

真由はそう腹を括り、紫苑に要求を突きつけた。

自覚なき深層心理において、蒔ヱのために犠牲となることも厭わない自分に、酔っていた。

さあ。果たして。紫苑の返答や如何――。

「お断りします」

あっけらかんと紫苑は答えた。

「どうして……？」

「嫌なものは嫌なんで」

「理由になってません！」

真由は怒りを隠そうともせずに喰ってかかる。

しかし、紫苑はそれ以上、真由を相手にしようとはしなかった。

ヘラヘラと柔弱な微笑を浮かべたまま。

だが、断固として。

真由がどれだけ押しても退いても宥めすかせても、首を縦に振ろうとしなかったのだ。

芯のない、意志薄弱な子どもにすぎないはずだったのに。

少なくとも真由はそう思っていたのに。

「あの新参者、絶対に不埒なことを企んでいます！」

その晩、真由は蒔ヱに訴えた。
「またあんたは過激なことを言い出すー」
風呂上がりの蒔ヱは、自室の鏡台の前に腰かけていた。
鏡には大伯母の呆れ顔が映っていた。
「決して大げさな話ではありません！」
真由は蒔ヱの背後に立ち、ブラシを使い、羨ましいほど艶のある大伯母自慢の長い髪を、甲斐甲斐しく梳いて差し上げながらも、ムキになって主張を続ける。
「《月の陣営》が強化され、底上げされることは、あの新参者にとっても望ましいことのはず！　にもかかわらず私の要求を突っぱねたのですよ？　人には言えないような、おぞましい企みを胸に秘めているに決まっています!!」
「例えばー？」
「私たち姫様譜代の騎士を蔑ろにし、あの〝黄昏の騎士団〟やらいう新参者どもで、《月の陣営》を牛耳ってしまおうだとかです！」
「紫苑君はわたしたちのこと尊重してると思うけどなー？」
「そんなはずがありません！　裏城紫苑は大伯母様を差し置いて、あたかも姫様の右腕の如く振る舞う不遜な輩！　あの男が連れてきた、水原渚や敦賀淳司もまた新参者の分を弁えず、我が物顔でのさばっています！　私たちがずっと体を張って守ってきた姫様は、そして《月の陣

営》は、あの外来種どもに乗っ取られてしまうのかと思うと、私は悔しくて堪りません!!」
「真由は表層的なところしか見られない上に、思い込みが激しいからなー」
「そんなことはありません！」
「うん。そこで断言できちゃうのが、そもそも客観性を欠いてるってとこから自覚しよ？」
「からかわないでください、大伯母様！」
敬愛する蒔ヱにひどいことをいわれて、真由は涙目になって怒鳴った。
蒔ヱが「いや、一個もからかってないんだけど。大真面目なんだけど」とぼやいていたが、聞こえていなかった。
蒔ヱはさらに嘆息一つ、
「あんたさー、前から思ってたんだけどさー」
「な、なんでしょうかっ。大伯母様のご忠告なら、喜んで聞きますっ」
「どっかで男を見つけてきて、恋の一つでもしてみたらー？」
「またその話ですか！　なんで今そんな話になるんですか!?　どこから出てきたんですか!?」
「表層的なところしか見られない上に、思い込みが激しい――ってそれだけ言ったら短所だけどさー。あんたみたいなタイプが一回恋に落ちたら、めちゃくちゃ男に尽くす女に化けると思うのよね。男も喜ぶんじゃない？　まあ、チョロくて重い女ってことだけど」
「わ、私は男など必要ありません！　敬愛する大伯母様がいれば充分です！」

真由は大声を出して否定した。
その間も手は止まらず、蒔ヱの髪を壊れ物のように丁寧に丁寧に丁寧に丁寧に、愛情をこめて込めて込めて梳かし続ける。
「ほら重いー」
鏡台には、大伯母の憮然顔が映っていた。
「からかうのはもういい加減にしてください！　大伯母様の唯一、悪いところです！」
真由はとうとう憤慨して、ブラシを鏡台に置いた。
（意地悪な大伯母様の髪なんて、もう二度と梳いて差し上げません！　今夜はもう二度と！）
そのままドスドスと乱暴に足音を立てて、蒔ヱの寝室を出ていこうとする。
「まー、もうちょっとがんばってみたらー？」
その背中に、蒔ヱの声がかかった。
「何をですか？」
「紫苑君に、不死者にしてもらえるように、お願い続けてみたら？」
振り返った真由と、鏡台に向ってブラシを続ける蒔ヱの目が、その鏡越しに合う。
真由の大好きな、優しい大伯母の目だった。
自分が幼い時分から、ずっと見守り続けてくれた目。
母よりも母らしい目。

からかう色など微塵もない。
「も、元よりそのつもりですっ」
真由は強がった態度をとりつつも、蒔ヱの忠告に従うことにした。
「そ。じゃーがんばー」
「はいっ。ありがとうございますっ」
強がったポーズのまま礼を言い、今度こそ蒔ヱの寝室を後にした。
だから――
「好意につけ悪意につけ、わたし以外に強い関心を持つのは、いい傾向よねー」
という蒔ヱの独白は聞こえなかった。

翌日。朝食の一時間後。
紫苑に一人で裏庭のテラスに来るようにと、真由は言い置いた。
しかし指定の時刻が近づいてきても、真由はまだテラスに赴いていない。自室の姿見の前で、己の格好とにらめっこしていた。
上は真由が好んで着る、清楚な雰囲気のブラウス。ちゃんと夏物だけど長袖になっていて、襟元周り同様に肌の露出面積が極めて少ないデザインのもの。

だが下は、いつもより丈の短いスカートに冒険した。膝下三センチ――つまりはふとした動作で、膝小僧がチラ見えしてしまう長さだ。

（ううっ、こんな下品なミニスカートを穿くのなんて、生まれて初めてですっ）

選んだのは自分だが、恥ずかしくて人前に出る勇気が湧かない。

とはいえ、いつまでもまごまごしていられない。気づけば待ち合わせ時間直前。生真面目且つ良家で躾けられた真由は、遅刻するなど絶対に許せない性分なのだ。覚悟を奮い起こして裏庭に向かう。

すると紫苑が先に来ていて、テラスの木製ベンチで寛いでいた。

「遅れてしまい、大変申し訳ありません」

「時間通りだから気にしないでくださいよ、真由さん」

ここは丁重に頭を下げた真由に、紫苑は慌てて頭を上げるように言った。

同時に、ベンチの隣を勧めてくる。

それで真由はふと気づいた。紫苑は先に来て一人でいたのだから、長い椅子の真ん中に堂々と座っていればよいものを、わざわざ端っこに腰かけていたのだ。

理由は明白だった。真由がすぐ隣に並んで座るのを嫌がると見越して、両端に離れて二人が腰を下ろせるポジショニングにと、気を遣ったのだろう。

渚は紫苑のことを「女心がわからない」と小馬鹿にしていたが、どうしてどうして。

看護師務めをしていた蒔ヱから、以前に聞かされた話を思い出す。長期入院を余儀なくされた子どもは、周囲や大人の顔色を読むのが、哀しいくらいに上手くなるのだと。

紫苑もその例に漏れないのだろうか。

真由はそんなことをつらつらと考えながら、ベンチに腰を下ろした。

「失礼します」

と折り目正しく断ってから。

紫苑のすぐ隣に。

つまりは、二人してベンチの片端に陣取るという奇妙なポジショニング。

「ま、真由さん？」

「こ、この方が話をしやすいでしょう？」

自分でも下手な言い訳だと思いつつ、真由は早口で言った。

ひどく緊張していた。全身がギクシャクとなっていた。

温室育ちの真由だ。家族や医者以外の男と、こんな肘が触れ合いそうな距離まで近づいた経験などない。

スカート丈が短いせいで、着席すると膝小僧が覗きそうだった。必死に裾を押さえていないといけなかった。

「そ、それで、改まって話ってなんですか？」

紫苑にも緊張が伝わったか、やや強張った口調で訊ねてくる。
「私を不死者にしてください」
「……またその話ですかー」
しかし真由から要件を聞くや、彼はすぐ呆れ口調になり、全身もげんなりと弛緩させた。
「私を不死者にするのは、あなたにとってもメリットがあるはずですっ」
真由は慌てて食い下がる。

この新参者どもをのさばらせないためにも、真由たちエミルナ譜代の騎士が、力をつけることは急務。紫苑たちに頼る必要などどこにもないのだと、毅然と示さなくてはならない。
ならばやはり不死の肉体は欲しい。
ともに不死者同士ならば、真由たち譜代の騎士が、新参者どもに負けるはずがない。
はずがないのだ。
そして、蒔ヱも「お願い続けてみたら？」と応援してくれた。
敬愛してやまない大伯母が、真由の考えを後押ししてくれた。
ならばもはや躊躇などしていられない！

（どんな手を使っても、まずは私が不死者になるのです。どんな手を使ってでも……！）

真由は胸の内で闘志を燃やした。
あるいは、悲壮なる意気込みというべきか。
「メリットといいますとー？」
胡乱げに訊ねてくる紫苑に向かい、真由は答える。
「う、ううっ、裏城さんはっ、美人のお姉さん、嫌いじゃない……でしょう？」
でも声を震わせてしまう。
真由は今、ひどく慣れない行為に及ばなくてはならなかった。断行せねばならなかった。
ズバリ、色仕掛けだ！
「ど、どうなんですか、裏城さん？」
真由は勇気を振り絞って、さらに紫苑との距離を縮めていく。
ベンチに載せたお尻をずらして、じりじりと彼の方へと。
ついに肘がぴったりとくっついてしまうくらいに。
（け、結婚前の男女が、なんて破廉恥な！　破廉恥な！）
自分で覚悟を決めてやったこととはいえ、真由は羞恥でもう耳たぶまで赤くなってしまう。
一方、紫苑は小憎らしいほど無邪気な笑顔を浮かべて、
「美人のお姉さんは大好物ですねー」
信じられないほど品性下劣なこと（真由の感想です）を、臆面もなく言ってのけた。

「で、ですよね。姫様ばかりか、大伯母様に対しても、いつも鼻の下伸ばしてますものね」
「ええ、僕、そういうの隠すつもりないんでー。自分に正直に生きる主義なんでー」
「う、うふふ、正直は美徳ですよね」
「あはは、そういってもらえるとうれしいなー」
紫苑は照れ臭そうに鼻の頭をかいた。
（何が美徳ですかこの淫獣が！　畜生道に墜ちればいいのに!!）
真由は内心、吠え猛って非難した。
しかし、紫苑がそんな女好きなればこそ、色仕掛けが成立するというもの。不死者にしてもらう交渉の糸口になろうというもの。ここは作り笑顔でがまんの一手だ。
「わ、私は裏城さんよりお姉さんだし、大伯母様ほどではなくても美人だと思うんですよ」
「真由さんには真由さんの魅力があると思うなー。優劣じゃないと思うなー」
（そんな歯の浮くような台詞、よく当意即妙に出てきますねっ）
「え、何か言いました？」
「お褒めに預かり光栄です、と♥」
「あー。なんだー。そうかー」
「美人のお姉さんだとあなたに認めてもらったところで、提案です。私が不死者になれば、それはもはや、わ、私の身もっ、心もっ、う、裏城さんのものだと言って過言ではないでしょ

う？　それって裏城さんにとっては大きなメリットでしょう？」
口に出すのも汚らわしい淫猥無比なる台詞を、真由はがまんにがまんを重ねて言い募った。
「うーん……。確かに僕の《騎士特権》は、そういう捉え方もできるのは否めないんですけど……。だからって僕はこの力を悪用して、女の子をどうこうしようとか思わないんですよね。それって後ろめたいだけで、全然気持ちよくないし」
（この淫獣！　心にもない綺麗事をよくもいけしゃあしゃあと！）
「え、何か言いました？」
「さすが裏城さんは高潔ですね、と♥」
「いやー。そこまで言われると照れるなー。真由さんは口がお上手だなー」
（ぺらぺらと舌がよく回るのはあなたの方でしょう!?）
「え、何か――」
「裏城さんの素晴らしいお人柄は理解しました！　でも、裏城さんだって年頃の男の子なんですから、時には劣情を抑えきれないこともあるんじゃないですか!?　間違いを起こしちゃうことだってあるんじゃないですか!?」
「いや、そんなことはないように――」
「きっとあるでしょう!?　こんな風に！」
真由は断言した。

同時に、最後の勝負に出る。
紫苑の薄っぺらな自制心を決壊させ、彼が真由を支配したくて堪らなくなるように。
つまりは、不死者にしたくなるように差し向けるのだ。
（私の性的魅力で、あなたの劣情をもよおしてみせます！）
胸の内で気炎を吐き、スカートの裾を押さえていた両手に、ぐっと力を込める。
恥辱に震えるのを堪えて、ゆっくりとたくし上げる。
生まれて初めて己の意思で、己の素足を男の目にさらすのだ。
膝小僧をチラチラさせて、男の獣欲を誘うのだ!!

（しっっっ……死にたいくらい恥ずかしい……っ）
でも、がまんだ。
紫苑をその気にさせて、不死者になってしまえばこっちのもの。
以後、釣った魚にエサをやる気など毛頭ない。
紫苑が《騎士特権》を使って、無理やりに不埒な行為に及ぼうとしてきたら、その時はエミルナに言いつけてやる。
紫苑は思慕する姫に軽蔑されるのを怖れて、何もできなくなるはずだ。

（だから！　さあ！　早く私の魅力に悩殺されなさい！　私があなたにこんな真似をしてあげるのは、今だけですよっ。今だけの大サービスなんですよっっっ）
真由はもううついむいて、羞恥で目をぎゅっとつむって、スカートの裾をにぎりしめたまま、膝小僧を機械的にチララチララチララチララさせ続ける。
「あのー……真由さん……」
「にゃ、にゃんでひゅかっ!?」
「僕、女性の膝頭（ひざがしら）で欲情できる性癖（フェチズム）はないです……」
「はぇっ!?」
「小学生でもそれじゃ興奮しないです」
紫苑は困ったような笑顔を浮かべていた。
その瞳は真由の稚拙な企みなど、全て見透かしているかのようだった。
「うわあああああああっ」
真由は真っ赤（まっか）になった顔を両手で押さえて隠した。
じゃないと、そこから火を噴いてしまいそうだった。
「せめて生でおっぱい見せてくれるくらいじゃないとなー」
「そんなことするくらいなら死を選びますっっ」
「じゃー、まー、不死者は諦めてください」

「うわあああああああああああっ」
真由としては清水の舞台から飛び降りるくらいの覚悟だったのに、紫苑には「オコサマすぎません?」と笑われてしまった。
あながあったら入りたい。
べんちのしたにもぐりこむのがいいかもしれない。
そうしよう。
「うわあああああああああああああっ」
「いいオトナがみっともないから、出てきてくれませんかねー?」
「う、うるさいですっ。裏城さんなんか早くどっか行ってくださいっ。私、あなたのこと大っっっ嫌いです!」
ベンチの下にうずくまり、丸まった格好で真由は叫ぶ。
「知ってたですけどもー」
紫苑はクスリと苦笑いしながら、ベンチを立った。
そのままどこかに行ってくれるのかと真由は期待したが、違った。
恥辱に耐えきれずベンチの下に隠れた彼女を、紫苑は覗き込むように腰を落として、話しかけてきたのだ。
「真由さんの覚悟は伝わりました。やり方はアレでしたけど」

「ひっ、一言余計ですっ」
「だから、まー僕も覚悟を語るべきですよね。ちょっと恥ずかしいですけど。真由さんも恥ずかしかったので、おあいこってことで」
「覚……悟……?」
真由は丸まった姿勢のまま、ほんのわずかにだけ顔を上げた。
片目だけ、チラリと紫苑の方へ向けた。
彼はいつものヘラヘラした笑顔のまま、しかし優しく噛んで含むように語り出した。
「僕は何も意地悪で、不死者にしたくないって言ってるわけじゃないんですよ」
「嘘ですっ。私たち譜代の騎士に、力を与えたくないんでしょう!?　それで自分たちだけで《月の陣営》を壟断したいんでしょう!?」
「そんな大それたこと考えてませんってば」
紫苑はぱたぱたと手を左右に振った。
しかし、真由は猜疑心剝き出しの眼差しを向ける。
紫苑はその敵対的な視線をやんわりと受け止め、
「僕はむしろ真由さんや蒔ヱさんたち――エミルナに昔から仕えてきた騎士の皆さんを、リスペクトしてるんですよ。感謝してるんですよ。他の《陣営》の強敵たちから、エミルナをずっとずっと守り抜いて、すごいなって。ありがとうって」

「え……」
思ってもみない紫苑の台詞に、真由は一瞬息を呑んだ。
嘘か。誠か。判断に困った。
態度に出てしまったのだろう。紫苑は「信用ないなー」とますます苦い微笑を湛えつつ、真摯に語り続けた。
「僕だってエミルナを守るため、僕の〝黄昏の騎士団〟をもっと大きくしていくつもりです。たくさんの強力な騎士を不死者にして、加入させるつもりです。だけど――真由さんたちは、エミルナの騎士でしょう？　エミルナだけの騎士でしょう？　それを不死者にしたくないんですよ。絶対にしちゃいけないんですよ」
「あ……」
もう一度、息を呑む。呑まされる。
紫苑は話をしている間、一度も真由の猜疑の視線から逃げなかった。
嘘が顔色に出ないようにだとか、取り繕うそぶりなど微塵もみせなかった。
彼の方も真由の目をまっすぐに見て、逸らさなかった。
そして言った。
「わかって、もらえませんか？」
「……」

真由はもう二の句が継げなかった。
ベンチの下で丸まったまま、腰を下ろした紫苑の顔をじぃっと見つめる。
いつもヘラヘラしていて、姿勢もグニャグニャの、情けない少年。
今だってそう見える。表層的には。
――紫苑君はわたしたちのこと尊重してると思うけどなー？
――紫苑君は誰よりも強い芯が一本通った、男の子だと思うけどなー？
だけど、蒔エはそう言っていた。
真由が意固地になって認めようとしなかっただけで、さすがあの大伯母はわかっていたのだ。
蒔エの言う通りだったのだ。
紫苑には一本、強い芯が軸に通っている。
エミルナへの想いという芯が。
その紫苑が、ヘラヘラした顔のままで言った。
「真由さんは僕のこと大嫌いかもしれないけど、僕は真由さんのこと嫌いじゃないから。同じ

エミルナに仕える騎士同士、できれば仲良くしたいなーって」
おどけた仕種で、右手を差し出してきた。
その手を真由はじぃっと見つめる。
躊躇。逡巡。
でも結局は、彼の手をおずおずととった。
だって――
一本芯の通った人が、真由は好きだから。
凛々しく、美しいと思うから。

☽

それから三日後。
朝食をすませた真由がリビングに行くと、蒔ヱがソファに腰かけていた。
スマートフォンで何か熱心に調べ物をしていた。
「どうかされましたか、大伯母様？」
「うん、今日ちょっと時間ができたから、紫苑君を誘って映画でも観に行こうかなって。紫苑君が好きそうなの、今やってるかなって」

「またあの新参者とデートなさるおつもりですか！」
「また紫苑君とデートするなって真由は言うわけー？」
「そうです。映画館に誘うなど、言語道断（ごんごどうだん）です。諦めてくださいませ」
「えー。そんなの私の自由でしょー？」
蒔ヱが子どもみたいな拗（す）ねた表情になって言った。
そのまま反論してくる気配をみせたが――
「真由さん、お待たせー」
蒔ヱが何か言うより先に、紫苑がリビングに顔を出した。
「え、なになに？　真由ってば、紫苑君と待ち合わせてたの？」
蒔ヱがきょとんとなって訊ねてくる。
真由は澄まし顔を作ると、上手いことを言って誤魔化そうとしたが、
「うん、真由さんが僕に服を買ってくれるっていうんで、買い物に行ってくるよー」
紫苑がいち早く、バカ正直に答えてしまった。
たちまち蒔ヱがニヤーッと人の悪い笑みを浮かべ、
「え、なになに？　どういう風の吹き回し～？」
揶揄（やゆ）口調で真由に訊ねてきた。
「べ、別にどうということもありません。裏城さんは入院生活が長かったから、あまり服を

持っていないと言うんです。それが可哀想なだけです」
「だからって真由がわざわざ～？　ふ～ん？」
「いっ、いけませんかっ。同じ姫様に仕える騎士同士、仲良くするのは《月の陣営》にとっても大事なことのはずです！」
「ふーん。ほーん。なるほどー。そりゃわたしが今日、映画に誘うわけにはいけないわよね～？　真由の人生初デートを邪魔するなんて言語道断よね～？」
「デデデデデデートなんかじゃありません！」
「えっ、僕、てっきりデートのお誘いだと思ってたのにっ。喜んでたのにっ」
「あなたも勘違いしないでください裏城さん！」
「で、真由はどんな服を選んであげるの？　紫苑君をどんな好みに染め上げるの？」
「意味深な言い方をしないでくださいっ。第一、お金は私持ちですが、選ぶのは裏城さんです」
「えっ、真由さんが見立ててくれるから、僕は黙って袖通しとけって話じゃなかった？」
「あなたは空気を読んで話を合わせてください紫苑さん!!」
蒔ヱと紫苑の両方に大声でツッコまされて、真由は忙しかった。
すっかり息が上がってしまった。
「さあ、行きますよ！　早く！」
これ以上ボロが出る前に、蒔ヱに妙な勘繰りをされる前に、退散することに。

紫苑の腕を強引につかんで、引っ張っていこうとする。
「お、やるわね、真由。早くも紫苑君を尻に敷いてるわね。女冥利（みょうり）ね」
「だから変なこと言わないでください、大伯母様！」
「あはは、僕はそういうの嫌いじゃないんで、楽しんでますけどー」
「あなたももっと男らしくなさい、情けない！」
真由は眦（まなじり）を吊り上げて、ぴしゃりと言う。
同時に、
（私は水原さんみたいな女とは違います。あんないつもツンケンしていませんし、男を尻に敷こうだとか考えたりしませんっ。侮辱ですっ。侮辱ですっ。どうしてわかってくれないんですか裏城さんはっ）
などと胸中で拗ねる。もし渚が聞いたら「ハァ真由さんがそれ言うー？」とさぞ心外にするだろう主張で。
一方、紫苑はいつものヘラヘラした態度のまま、
「えー男らしいとからしくないとか、もう古くないですかー？」
「古くから伝わるものには、それだけ良さがあるということですっ」
「真由さんはお堅いなー」
「あなたが軟弱なだけです！　裏城さんも姫様の騎士になった以上、これからは改めてもらい

ますからね？　まずはそのだらしない格好からです。男子に相応しい服装というものを、隙なく着こなすようになることで、少しは立派に見えるようになるはずです」
紫苑の性根を正すため、より強い芯が一本通った男になってもらうため、真由は口やかましくお小言を続けねばならなかった。
「なーんだ。やっぱり真由好みに染めようってつもりじゃないのー。隅に置けないわねー」
「違います大伯母様！」
「真由さん……僕、あんまりちゃんとした服とか着たことないんだけど……」
「和装をさせるつもりはさすがにありません。洋装なんてシャツもスラックスも特別な着付けなんてありません。ただ、きっちりと毎日アイロンをかけるだけで、襟元や袖口をしっかりと締めることで、あるいは裏城さん自身も常に姿勢や立ち居振る舞いを意識するだけで、人の見え方なんていくらでも変わります。凛々しくなれます」
「うぇー、あんまり面倒なのはやだなぁ……」
「アイロンは私がかけてあげますから安心なさい！」
「え、毎日？」
「ええ、毎日です。か、感謝するようにっ」
「わーい、新婚夫婦みたいー」
「しんこ！？！？　あなたはすぐそう調子に乗って！　姫様に言いつけますよっ」

「別にいいですけど？　エミルナはそんな程度で僕に愛想尽かさないと思いますし」
「なんでこういうことだけ男らしいんですか！」
「嫌いですか？」
「嫌いじゃないですけどっ」
「わーい、新婚夫婦みたいー」
「言い直さなくてよろしい！　喜び直さなくてよろしい！　あなたのそういうふざけた性根は、今後徹底的に叩き直して差し上げますからねっ。あくまで姫様に相応しい男になってもらうために！」
「あはは、お手柔らかにー」
口とは裏腹に、困るどころか楽しんでいる様子の紫苑を、真由はそうと気づかずに問答無用で引っ張っていく。
ガミガミとお小言を続ける。
だから、リビングに残った蒔ヱの独り言は聞こえなかった。
「なんだかんだ言っても、やっぱり男に尽くすタイプだったわねー、あの子――」